旬／な／人
水鳥友紀子
会社が続いている中で生まれた
オリジナル下駄を大切にしながら、
100年企業を見据えて、
さらなる事業の柱を見出す

オトナの休息時間
［イタリアン］
MASSIMO（マッシモ）
ないものは生み出す！
常に最高を模索し続ける
本格イタリアン

CONTENTS

4 旬／な／人 **水鳥友紀子** 株式会社 水鳥工業　代表取締役社長
6 **Company File** 一般社団法人 しずおかビジョン研究所
8 特集／まちづくり **キーワードは「生活の質」と「持続可能性」の向上!!**
13 企業産業レポート
24 **セミナーインフォメーション**
25 企業倒産など信用情報
26 新法人紹介
29 **女性たちの"かしまし"トーク　Relay第324走者**
西岡利枝さん　GAIA♡SMILES　代表
男たちのリレーエッセイ"わたしの本棚"　Baton324
松浦久史　㈱ジーベック　専務取締役
30 経営革新計画承認企業一覧
32 **ラ・サンテ**～ビジネスマンに健康を～
34 特別寄稿⑩ いよいよ4月から施行される「同一労働同一賃金」
正社員と非正規労働者との間の不合理な待遇差の解消を!!
㈱テンポイント（社会保険労務士法人オフィス・テンポイント併設）
36 特別寄稿④ **デザイン×建築** アンフィニホームズ 吉川均の軌道
38 オトナの休息時間 ［イタリアン］**MASSIMO（マッシモ）**

【お知らせ】 今号で掲載しているイベント、セミナーなどの開催予告記事は、編集作業終了時点の情報です。
新型コロナウイルスの影響で変更になる可能性がありますので、詳しくは各主催者にお問い合せ下さい。

【メディア掲載のお知らせ】

静岡ビジネスレポート vol.1448　2021年3月20日号

静岡ローカルのビジネス専門誌・静岡ビジネスレポートの
「旬な人」コーナーで、社長の水鳥友紀子が取り上げられました。
事業継承にかける想いと、今後の展望を語り尽くしています！

2021年3月20日発行　第1448号（毎月5・20日発行）昭和51年4月15日第3種郵便物認可

静岡ビジネスレポート
http://www.sb-report.net

Shizuoka Business Report

No.1448
3/20

旬／な／人
水鳥友紀子
株式会社 水鳥工業　代表取締役社長

Company File カンパニーファイル
一般社団法人 しずおかビジョン研究所

オトナの休息時間
［イタリアン］MASSIMO（マッシモ）

特集／まちづくり キーワードは「生活の質」と「持続可能性」の向上!!

サンダルやシューズの部材を製造していた㈱水鳥工業。現在は、洗練されたデザインの下駄が主力商品となっている。2019年に代表取締役社長に就任した水鳥友紀子氏は、入社以来、会社の風土改革に着手し社員の意識に変革をもたらしながら、さらに新たな事業展開を模索している。その目指すところはどこなのか、話を聞いた。

旬／な／人

水鳥友紀子

株式会社 水鳥工業　代表取締役社長

創業から時代の変化に合わせて生まれたオリジナル下駄を大切にしながら、100年企業を見据えて、さらなる事業の柱を見出す

商品と会社が見合うよう社員の意識改革に着手

㈱水鳥工業が製造する下駄は、ウェブショップ、雑貨店やインテリアショップなどの小売店、卸などで販路を広げている。またホテルや旅館で館内履きとしても採用されている。「全国の百貨店の催事では毎回訪れるファンも。多くの方が製造元は東京の会社だと思っているようで。それはそれで嬉しいです」と水鳥氏は言う。

2012年、後継者になると宣言して入社。下駄の製造、販売も軌道に乗り、デザイナーとのコラボ商品の開発も順調だった。「でも、下駄が売れるようになっても、会社がまだ個人商店の雰囲気だったのが恥ずかしくて。商品の価値を社員が本当にわかっているかも疑問だった」と振り返る。自信を持って商品を売り続けたいという思いも強かった。そこでまず始めたのは、自ら現場で社員の意見を聞き、消費者から寄せられる意見を現場に伝えることだった。社員が思っていることを言葉に出せる環境を作り、改善に繋げたいと考えたが、全ての社員がそうした変革を理解し受け入れたわけではない。2年程前までには、水鳥氏の入社時から8割程の社員が入れ替わったそうだ。「辞めた人に問題があったわけではない。私が子どもの頃から働いてくれている人もいる。ア

プローチの仕方は違っても、最終的に目指す方向性が同じならばいいのでは〟まずやってみよう〟と行動する人が集まればいいなと。でも、まっさらの状態で入社した若手社員にその状態を示すためには、古い社員の意識改革は不可欠でした」。

離れていても応援した家業 思い入れの強さですれ違いも

1937年、下駄の木地製造で創業した㈱水鳥工業。時代とともにサンダルやシューズの部材製造会社に。2代目で先代の正志氏が下駄に着目したのは1989年。視察先のインドネシアで、木製の履物が作られているのを知る。「履き心地のいい木地を作れば売れると考えたのかな。材料もその時に買い付けてきた」と水鳥氏。ただ、国内ではあまり需要がなかった。ならばと、自社での下駄生産が始まった。「祖父は下駄で創業していますし、その様子を父も見ていた。だからこそ、履き心地のいい、下駄とシューズのハイブリッド製品を作ろうと思ったのかもしれないですね」。

この家業の転換期、水鳥氏は中学生だった。従来の仕事が減少しているのに加え、急に細々と下駄の製造にチャレンジし始めたのだから、がんばっていると思う反面、子どもながらに将来への不安がつのった。手に職を付けようという思いが強くなり、年をとっても自分一人が生きていくのには困らないと、美容師になった。「継ごうとは思わなかったけど、実家を離れても、下駄の商売も意外と持ちこたえているし㈱、ずっと家業は応援していました。静岡に戻った時は、自宅で美容師の仕事をするつもりでしたが、ちょうど事務員が辞めてしまうので、会社を手伝おうと社員になりました。1年だけ」。

会社に入ると、昔ながらのやり方が気になることも多かった。取引先とトラブルになる前にと改善点を意見する。「家業だからこそ思い入れが強くて、あれこれ言ってしまって。昔から続けている人間からすれば、たかだか1年で何がわかるんだという気持ちでしょうね。家族ともちょっと険悪な雰囲気で、新しい事務員の採用が決まった時点で、二度と家業に関わらないつもりで退職しました」。

コロナ禍で再認識した 会社を継ぐ者としての決意

3年ほどのブランクを経て再入社。「この事業を絶やすのはもったいないし興味もある。下駄の奥深さをもっと広めたい。今度は後継者という前提で入社するから、私の意見も聞いてほしいと宣言しました」。2014年に専務取締役、2019年に社長に就任。オリンピックイヤーの2020年に向け、インバウンドの増加に伴う需要を見込んだ商品開発に乗り出した矢先、コロナ禍で混乱した。「非常事態では下駄の優先度は低いと実感しました。もちろん、これからも大事に育て、販売していきます。静岡産ヒノキ、駿河和染や遠州織物の鼻緒を使った下駄も発表しました。一方で、下駄にとらわれずに、会社を次代に繋げる作戦も真剣に考えるようになりました」。

時代の変化に合わせて 次の展開を模索する

新しい試みがある。カナダ出身のご主人で専務取締役がオープンさせたショップ「縁Ｊｏｙ」だ。「彼が選んだ〝静岡のいいものや、企業の取り組み〟を発信しているお店です。地元で下駄を履いて頂ける場として、また雑貨店など小売店へのプロモーション的な役割や社内起業のモデルケースとしても期待している。エンジョイできないほどの課題を課しているんですよ㈱」。

水鳥工業の名を残すのは、ものづくりだけでなく、サービスかもしれないと水鳥氏。「社員も家族も最終的に私が支える。でも私が手に職を付けて生き抜こうと思ったように、社員にも強くなってほしい。水鳥工業が続いている限りは、最終的に会社に還元してもらう形で、別のビジネスを始めてもいいと思う。そうすればきっとユニークな会社になる」。

下駄周りアイテムの開発も進めている。その販売第一弾商品が下駄と一緒に履ける靴下だ。静岡市内の「社会福祉法人 共生会 ライク」が運営する「ニット工房ライク」との連携で商品化した。「新しい取り組みは、やりながら改善していけばいい。無理ならやめるジャッジもできる。これが会社を続けていくための、私のやり方。家族は〝大丈夫なのか？〟と心配しながら見守っていると思うけど」。創業から84年。「100年の節目にバトンを次に渡す」〝やってみないとわからない〟という前向きな思いが、様々なことにトライする水鳥氏の原動力になっている。

■略歴

水鳥 友紀子（みずとり ゆきこ）
1978年生まれ。42歳。英和女学院高等学校卒業後、東京の短大へ進学。その後、美容専門学校へ。横浜のヘアサロンで勤務。2007年に静岡へ戻る。2012年、後継者として水鳥工業に入社。社内風土の改善に尽力し、2014年、専務取締役に就任。2019年、代表取締役に就任し、現在14人の従業員を率い、新アイテムの開発も積極的に行う。プライベートでは4歳の男の子の母親。